太棹

第百三十八號

昭和十六年三月廿八日
第三種郵便物認可

昭和十七年八月廿八日 印刷納本
昭和十七年八月三十日 發行

（毎月一回
三十日發行）

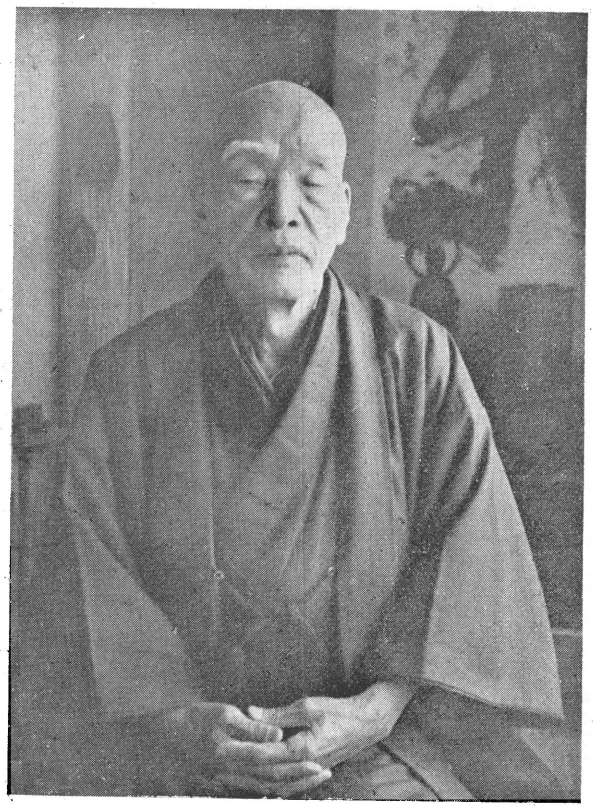
太棹（第百三十八號）

本所區向島須崎町九五
御待合 梅よし
電話墨田四七五五番
水島春枝
道順（須崎町電停より半丁先交番前電車通りを左へ入り右へ曲つて二軒目）
淺草區雷門二丁目一九
淺草宅 野澤道之助
電話淺草三七九番

風流・金ぷら・茶漬
（美地句）
大阪屋
新橋二ノ八
電銀二〇八

貸席
並木倶樂部
淺草・雷門
電話淺草一二三五番

大阪文樂座出勤の 鶴澤觀西翁



（前號記事參照）

七十九歳の高齢を以て元氣益々旺盛の鶴澤觀西翁は前號既報の通り、十月興行より大阪文樂座に出勤する事になりましたが師が今より五十餘年前野澤八兵衛と名乗つて文樂座に出勤中、今の豐竹古靱太夫師が十三歳の時初めて大阪に出て法善寺の津太夫に入門した時の事「聲柄もよく中々語る子供だから、三味線を彈いて貰ひたい」との法善寺の話に當時數度彈いて、古靱太夫師も子供ながら頗る評判かよく人氣を博したものださうですその古靱太夫師は今は檜下となつて五十餘年振りで顔を合はせるなど隨分古い話でもあり亦奇縁ではありませんか。觀西翁は九月十六日午前九時の燕で下阪、新町の「か津み旅館」に投宿されました。

越後句稿

芳河士

清水峠

越えし山一つ一つが霧に入る

彌彦街道

蟬涼し奥の細道辿りつゝ

峰つくる雲や野茶屋の葭簀屋根

吉田にて

虫いろ〳〵更けて飯みをり月を待つ

我醉えば戯作するものみな涼し

出雲崎驛

藥賣りと終車待ちをり天の川

○

咳止まぬうき旅となり秋の風

○

秋近き里にねて歸心矢の如し

太棹 第百三十八號 目次

表紙・カット……齋藤清二郎

口繪 文樂座出勤の鶴澤觀西翁

滿洲『影戯』考……島東吉（七）

呂昇と小仙其他……内田三千三（九）

文樂人形小道具帖（九）……宮尾しげを（一〇）

古靱太夫櫓下披露興行……齋藤拳三（一一）

義太夫獨習……杉山田庭（一三）

白茅亭雜記……富取芳河士（一五）

會報・消息……（一六）

日光湯元より（德永靜翠）　德島縣人在京素義會鄕土訪問記（宮内ほくろ）　北海道より（豐澤廣助）

太棹社彙報……（一九）

社告・當座帖・訃報・編輯後記

古靱太夫櫓下披露興行

齋藤拳三

善きものを實質以下にかへり見なかつた大阪の人形浮瑠璃文樂座は其の反動か今度は東京で實質以上の大入り大歡迎である。丁度有價證券市場を政府が下を止めれば上へ行き過るし、上を止めれば下へ行き過て困るのと同樣である。

新櫓下の古靱太夫は自分の時代になつて文樂がつぶれては申譯がないと其れのみ心配して居たが、其れは一片の杞憂になりさうである。只、質が非常に下落して行くのは何うかしなければならない、私は瓦全より玉碎主義である。

第一回　七月一日

大體文樂は出し物が一つづゝ多過る、此の興行も二人禿が餘分である、特に今度は榮三、文五郎の老體をいたわつて、成可く負擔を重くしない配役らしいが、其れなら此の二人禿など猶更二人を休養させる意味で蛇足である。

此の日の秀逸は妹脊山の道行のシンを彈く仙糸の三味線だつた、あの弱腕で間の善さと撥の返り一つであれだけの味を出すのは、品質抵下の今の文樂では名物の一つである。

古靱太夫の谷三は結論的に言つて部分的に考へ過ぎてる語り口である。「十六年は一昔」の件は相變らず美事だが、總體に長い樣に感じられて面白くない。陣屋の人形は「飛びのきうやまい」で相模の好き動きがあつて「言上す」の大見得と共に結構である。玉助の彌陀六は「日影にとけし」の件で泣くのは新案である。

先代萩は御都合主義の語り場ばかりあてがわれる呂太夫が氣の毒である、後半を語る南部太夫の絃重造が「千松が」の後のハリ切りを彈き損じてゐたのが耳に附いた位だ、人形は平凡である。

廊下で大谷友右衛門に逢つたが、紋十郎の遣い方を第一に

賞めて居たが、役者の感識眼も幼稚なものだと思つた。

第二回

切符を取つた此の日、折悪しく私は病氣で不參したが、大隅太夫の「吃又」は先年の演出によるとなか〳〵結構なものである、特に將監の語り方が面白いのは、先代ゆずりだからであらう。ラリルレロの後でホヤと云ふのも面白い。

三代目大隅が晩年文樂へ入座の時の出し物は、第一回が壺坂で、第三回の出し物が「吃又」であつたのを見ても、師が得意の出し物で、三代目清六が相三味線に拔擢せられた當時雅樂之助の注進の出の三味線をあの鬼腕と云はれた清六に、もつと手強く彈いてくれと注文した逸話が殘つて居る、思ふに大隅としては名人大團平と同樣に彈いてもらひたかつたのであらう。

古靱太夫の太十も越路太夫急病の五日間の代役で天晴れ名聲を博した出世藝である。當時古靱最屓の理髮店の主人が、古靱の太十を聽く樣にとビラをまいて歩いたと云ふ一挿話がある。當の古靱太夫は少しも此れを知らないのに、無關係の土佐太夫が最屓は有難いものだと云ふ實例に此の話を筆者にしたのは面白い。古靱太夫は當時越路の相三味線六代吉兵衛が弱腕に見えても横へ座ると、其の止め撥の鋭さが腹にこたへたと述懷してゐる。

期待した大隅太夫の「吃又」と古靱太夫の「太十」を聽き損じた代償に、二つの藝界佳話を書いておく。

第三回　七月十四日

此の日私は驚くべき亦悲しいニュースを開幕前耳にした。即ち生寫朝顔日記は、南部、伊達の內いづれが前半を語るかと幕內の某氏に質問したのである、すると其の答はこうであつた、「其れは定まつて居りません、組見のある方の人が好きな場所を語るのです」と、私は全く啞然として言葉が無かつた。

丁度此の日、斯道に造詣の深い畑中長次氏(假名)を廊下に見かけたので、氏に三回目の藝評をしてもらう約束をした、處が同氏から多忙で私と會談する機會がないので、左の通知があつた。原文のまゝ載錄する事とする。

御葉書拜見仕り候過日は失禮、八月二日御上京の御通知に候へども八月一日より仕事を初めます、以前と違ひ手不足の爲め御話を申上る暇も無之御斷り申上候悪しからず御承知被下度候

宿屋の前には盲目節らしい處がなく滿足出來ません、大井川の方は別に六ケ數い處も有りませんが、只「天道樣聞へませぬ」が、ほんとのお稽古をせずに傳授事を知らないので、天道樣に云つてる樣に聞へませんでした。

良弁杉は私は知りません故、何處に傳授があるやら解らず申上る事が出來ませんが、相生さんは不勉强の人の樣に思はれます、三味線と合ひさへすれば宜しと思つて居る方のやうです、吉五郎さんの絃は感心しません。

櫻の宮の呂太夫さんは結構でした。二月堂は御大らしい流石と思はれますが、餘り逃て語る樣に思ひます。清六さんは結構です、大隅さんの日吉の三は結構ですが、吉晴とお政は感心しません、綱造さんの阿古屋は天下一品です。

（以上原文のまま）

第四回　七月十九日

此の興行にしても安宅關だけが蛇足である。前の場は松葉目の能舞臺、後の場が寫實の海岸のバックである、此んなゾロッペーの芝居はない。伊賀越の新關はカケ合の惡型だが、つばめの志津馬、南部のお袖は上出來であつた。七五三太夫の助平は舌たらずで、綱造になんとかして頂きたいものである。

岡崎の端場は呂太夫仙糸でこれも結構だつた。古靱太夫の奥は痛めた調子も回復し、マクラから美事で、久々に實力を發輝した。「幸兵衛手に取つて」や「政右衛門と云ふ奴」など何でもない箇所が滋味津々たる語り口であつた、あの長帳場が長い感じがなく流石に櫓下らしい。

人形も幸兵衛に廻つた榮三を初め、文五郎のお谷、光之助の志津馬、紋十郎のお袖、小兵吉の幸兵衛女房皆よく、玉造の政右衛門だけは少々落ちるが揮然たる一幕だつた。特に玉造の政右衛門が取手の提燈を切つて其れを持つて竹やぶに入る技巧は人形らしい稚拙感があつて面白い。岡崎の幕切れに本文通りお袖が白衣で出るのも、歌舞伎が此の件を省略してるだけに結構である。

堀川の伊達太夫はあの名快な美音を十分に發揮する樣勉强して望しい。勝平の糸は弱腕の爲か理ずめ過ぎて面白味がない。後半の相生太夫は平凡である。人形は政龜の婆が結構だ「あの面白さ」でお鶴が一人で彈く間、三味線を手にして見て居る件が流石に味がある。紋司のお鶴は撥で頭をかいたり場當りがひど過る。玉助の與次郎も寢てから足をばた〳〵仕過ぎる、一體に人形の與次郎は誰のを見ても感心しない、特に古靱太夫が語ると床と人形との解釋が違い過ると思ふ。

第五回　七月廿三日

市川三升は榮三のあの立派な尾上を見た後で、同人の釣女の太郎冠者は見るにしのびないから歸つたとの由、此れは全く同感、敬服である。

此の日は釣女の外にも一つ餘分な日高川がある。綱造はこんなチョボの樣なものは彈いてゐられないとあつて出なかつ

た。處が皮肉な事には此の出場しない第五回目が綱造の組見に當つて居たとの事である。

人によつて見方、考方、說は色々あらうが、筆者は組見が有つても日高川を彈かない綱造の潔癖を偉いと思ふ。組見のある太夫には好きな役場を語らせるなど、言語同斷の文樂には一種の清涼劑であらう。

此の日、めずらしく薩摩守忠度の流れの技が出たが、人形の配役も無理、太夫の役場も無理で、折角の古劇復活もあたら犬死である。大谷竹次郎氏は一日の生活中一番樂しいのは芝居の出し物と配役を考へる時ださうである、それならば文樂座の出し物、配役も考へて頂きたいものだと思ふ。

時雨炬燵は前半を語る南部太夫が上出來で「生きてゐる氣じやない」や「よもや忘れはさしやんすまい」など耳に殘つてゐる、重造も此の日はよく彈いて居た。

人形はめずらしく政龜のおさんで、手拭を傍ふ遣り方など結構な出來である、「蜆川へ」の件もめずらしい技巧である、「いちぶんたてゝ」で炬燵へ泣きふす件、「思いやられ」の裏向きの形、老いても流石である。政龜の樣な保守主義の人形遣は、技巧に信用の置けるだけでも結構である。

加賀見山の廊下を語る大隅は面白かつた。駒、鍛の亡い以上、今では端場は此の人あたりが面白い、特に岩藤をうまく語つた。「仕合者」や「彈正樣」など耳に殘つてゐる。

古靱太夫の長局は亦聲を痛めた上に清六が指を痛め、團六代役の爲か平常程の意氣がなく、何時も此の人だとサラリと語り捨てゝ無類な「遺物別ケ」からお初を出してからの一人舞臺のクドキが、二番刷りの錦繪で上りが惡かつた。人形は昨年と反對に門造の彈正に、玉造の岩藤だが此れも美事である。ヒジでお初を突く技巧も人形獨特で面白い。

榮三の尾上は此人の最大傑作で、荒物を遣ふと少々氣魄を缺く榮三としては最も本質的の代表作である。

文五郎のお初は廊下がうまいだけで、長局の後半は動き過て感心しない。尾上の書置の間團扇を色々に使ふ型も惡い型である、こんな事は若い人形遣さんにはお解りになるまい。若手大天狗の榮三郎さん、如何です。

私も市川三升氏のお說の如くこゝでサツサと退場した。

第六回　七月廿六日

大序で門造の師直の「早いわ」の件が惡々しくうまい。

三段目は「殿中だ」の後の見得がいゝ。裏門を彈かせたい仙糸は、殿中では丸で河童が陸の形である。

四段目の古靱太夫は今日は調子がなほつて、清六も復活して美事な四段目であつた。九太夫、鄉右衛門、藥師寺をサラリと語つて昔日の古靱太夫らしい美事な出來である。

特にうまいのが九太夫の笑ひ、藥師寺の「切腹には法のあ

るもの』の言ひ方「ッラふくらし」の吹いて云ふ様な、亦吹いて云はない様な言ひ方等、「三人出向ふ」は「皆々出向ふ」と語つて居た。

人形は政龜の郷右衞門、小兵吉の石堂が流石に立派である石堂は長をさばいて死體に得釋する件などいゝ持味である。

悪いのは玉造の判官で、疊へ足をかけて首をふるのは何の意味か。

由良之助の門外の馬鹿長いのもくだらなぬ悪型である。

身賣の幕あきに文五郎のお輕と、小兵吉の婆とのやり取りは何でもない様だが、此れは好い役者のうまい捨ゼリフの様なもので、一寸若手の女形には出來ない藝の味である。

期待した大隅太夫の六段目は「深編笠の士二人」からで、前は他の太夫が語つた。「かたじけなや有難や」や「おかまいなくとも」を例に取るまでもなく、先代以來の寫實的な語りロが獨特で面白い。「金は、金は女房」などの大隅一流のグロの所もあるが、何にしても樂しめる太夫である。亦、血判の件をクライマックスに語るのも獨特である。

筆者は靜時代の此の人を贔負にした杉山翁を、矢張り具眼の士と敬服して居る。

七段目になつても大隅太夫の由良之助は結構だ、特にいゝのは「江戸三界」の後の笑ひ、「一軒茶やの火か丸山の火か」の力彌の來た時の唄の一人言に聞へる點、「爐の炭もついでおけ」の「け」を呑んでしまう事等。

黑足袋で出る古靱太夫の平右衞門も結構だ、此の平右衞門は昔日の古靱で、鋭い氣魄がこもつて居る。「醒ての上の御分別」などうまい音使ひである。

人形は榮三の由良之助の足が馬鹿に悪いのは氣の毒だつた

結論

今の文樂は一日中通して觀賞するのは苦痛である。

結局は古靱、清六、大隅、仙糸、綱造あたりを味ひ、榮三文五郎、下つても政龜、小兵吉、門造あたりを見物するより外はない。

然して今の組見の觀客層の目標は、若手の太夫三味線であり、若手の人形遣ひであらう。然し何としても團平大隅を知り、大掾、廣助を學んだ太夫三絃と、玉藏、紋十郎と同じ舞臺に立つた人形遣ひは、今の新進の若手とは藝の最高標準に大きな越えきれぬ溝の横たはつてゐるのはいなみ難い。

吾々筆を持つものは、筆の税金としても永き練磨の勞苦に酬ゆる爲にも、人氣とは別に技藝の玉石を別けてやらなければならない。其の爲、敵も出來るであらう。亦誤解も受けるであらう。然し其れは藝評をする愚者の宿命なので仕方がない。此の拙評が年一回東上する文樂に通ふ若い人の觀賞の一助ともなれば望外の喜びである。

協和遊藝茶社
大有可觀
特等樂亭影戲
茶水壹角
分五
晚價目
張占鰲 劉作信 李煥章 宋餘恩 陳錫久 劉魁章 孫品卿 張靜波 齊成瑞 劉魁武 李希五 張茂蘭

私が初めて支那の影戲（インシュー）（影繪）を觀たのは二十何年前といふ、隨分古い話でそれは山東省の青島だつた。當時、日本でも影繪芝居や紙芝居（因みに當時の紙芝居は紙人形を使つたものだが、今日のは紙繪の説明にすぎないから、

滿洲『影戲』考

島東吉

これを紙芝居と云つてゐるのはおかしい）が流行してゐて、芝居がゝりで聲色や鳴物を入れてゐたが――影戲も歌誦や鳴物を入れてゐたので、私は鄕愁みたいなものを感じたのだつた。

然るに昨年の夏、私は新京の舊城内の協和商場の樓上で、久し振りで影戲を觀て（支那では觀戲觀劇と云はず、聽戲聽劇と云ふ）二十何年前を思ひ出したが、それにしても鄕土藝能が傳統されて保存してゐることが、わがことのやうに嬉しかつた。

誰かの説に據ると、漢の武帝が寵姫李夫人の死を悲しむ餘り、その面影を寫せる紙を切り、之を秘房の紙帳に映して、せめての追憶してゐたことが濫觴と云ひ、また他の説に據ると、山東省出身の俳優が老年となつて舞臺に立てず、老後の生活のためにこの影戲を趣向したのが濫觴とも云ふ。其後、欒州影と樂亭影の二派に分れて各地を興行してゐたが、支那事變以來新興の滿洲國に安住の地を求めて移り、目下、奉天の舊城内の夕青茶社と、新京の協和商場の遊藝茶社とが專ら全盛してゐるとのことである。

私が協和商場の茶社（チャーシー）（又は茶館（チャーコワン））と云ふ。寄席みたいな小屋のこと。因みに劇場は茶園（チャーユー）と呼んでゐる）へ入つたのは、まだ春寒い四月末だつたが、

場内の暗中に一杯の客が詰め込んでゐて、大蒜の臭味や、汚れきつた着衣や何んとも云へぬ人體の臭氣や、そして惡熱を發してゐるやうな體溫とが充滿し、私は噎び、蒸され、忽ち嘔吐を催すほどだつた。兎に角、漸く正面よきところに割込んで、座席（緣臺みたいなもの）を作り、それに腰をおろすと茶社の出方らしい滿人が來て場代を請求した。

元來、茶社や茶園の入口に入場料を取る設備が無く、客が入つて來て落ちつくことを推察するや、極めて暢然と木戸錢乃至場代をもらひに來るので、もし客が氣に入らねば、素見のつもりで一幕ぐらゐは、ロハで見て、そのまゝ出場すればいゝ。まことに大陸的氣分で愉快至極だ。

それから瓜子兒（クワツツル）（東蒙で產する大瓜の種。俗に西瓜の種といふ）を一皿盛つて來た。これに二十錢ばかりやると滿人の出方が謝々（シエシエ）と、黃ろい齒を綻ばすのだつた。正面に高サ約三尺、橫約六尺の紙張りの枠（卽ちスクリーンである）があり、この枠に內部の燈火を利用して、影繪を寫してゐるのだが、その色彩がハツキリと映つて、頗る絢爛である。

樂屋に正角（主役）、武生（武者）、

（飛龍傳の女將軍）

小生（若武者）、正旦（女主役）、花旦（娘形）、武旦（女武者）、老旦（老婆役）、淨（敵役）、丑（三枚目）、末（端役）などの使ひ手と、唱・白の出演者がゐて、鳴物連中の椰子や胡弓や銅羅の伴奏につれて演技を行ふのである。馬上の戰ひ或は落馬の形など巧みなものだ。影繪の人形（動物も同じく）は驢の薄皮に小刀で刻みを入れて、これを黑・赤・靑の三色で彩り、首・胴・腰・腕・足の各部を糸で結び、その伸縮で動作されるやうに工作されてありまた、首は差替えの出來るやうになつてゐる。別に素人用（童玩）として紙製の人形があり、滿洲では奉天の江守信といふ製作者が有名である。

私の眼前の紙幕では、史劇「七本飛龍傳」（接演）なるものを寫してゐて、物凄く喧騷しながら大立廻りを演じてゐた。

文樂座に於て、たとへば古靱太夫が熊谷次郎直實を語り、その人形を使ふ吉田榮三と、この二人が一心同體となり、その魂が人形に凝つて、あだかも人形が生きてゐる神秘的な藝術を釀し出すやうに、影戲も使ひ手と、唱ひ手とが一心同體となり（使ひ手と唱ひ手と一人一役の場合もある由）、そして影繪に神秘的な藝能を表はし示すのだつた。しかも驢の皮で作り、不細工だし、それを僅に三色で彩つたものだがこれがまざまざと生物感を映し出すのだから、素晴しい。

日本でも邦樂座ぐらゐのところで興行したらばいゝし、きつと受けるにちがひない。一座も小人數であり、道具も寡いし、その費用もたいしたものではない。

私は幾らか支那語が解るので、瓜子兒を嚙みながら、倦かず、觀てゐた。今でも主役を唱つた孫品卿の土民的な歌誦が、私の鼓膜に快くひゞき殘つてゐる。

呂昇と小仙其他

內田三千三

某日、僕はふと宮城道雄氏の「音の世界」と云ふ一文の中で「呂昇の藝」に觸れてゐる點を興趣深く讀んだ。

それは「何んと云ふ語り物か記憶にないが、簞笥の抽斗から着物を取出し乍ら云ふ處が、當然呂昇は正面を向いて語つてゐるのに、うしろ向きで云つてゐる音調になり切つてゐた」……と云ふ意味の事を大層感嘆されてゐた。

想ふにそれは、「天綱島時雨炬燵」の一節と推想する。「光りの世界」を斷れて、音感の上に「人生と藝術」を眞究する「盲目の天才」を嘆賞させた呂昇の藝を、歌舞伎の名女形故歌右衞門は（安部豊氏編）の「自叙傳」で、こう記述してゐる。

「呂昇は美聲で洵に艶麗な淨瑠璃を語るけれど、私には小仙の方が腹應へがあつて、本當の淨瑠璃に近いやうな氣がする」……と。

僕は、この優れた藝術家の女義評を讀んで、二つの想感に觸れた。

歌右衞門は云ふ迄もなく劇聖團十郎の腹藝に薫陶された人である。從つてその好みも、自づと心理に重點を於て「藝術の眞」を描破しやうとする。活歷風の短所は稍あつても新史劇の女性表現（例へば淀君、春日局）に威大な記念塔を打ち建てた巨優である。

さればこそ……音樂的な美感より「魂の眞聲」を求めたのは當然である。

宮城氏は織妙艶美な呂昇の淨瑠璃音樂中に「心の眞聲」を把握した。前者が眞の中に「魂の美」を探究し、後者が美の中に眞を發見したのは、そのおの〳〵の藝術的天禀の具現化と謂へる。

當代の專門家では且つて古靱太夫がその藝談で吐露した淨瑠璃藝術の妙諦は、「情、眞、美」に結集すると云ふ「藝念」が犇々と力强く胸を打つ。

文樂人形小道具帳（九）

宮尾しげを

忠臣蔵

六ッ目

簑　一
笠　一
戸板　一
鐵砲　一
財布　一
金包　一
一卷　一
矢立　一
深編笠　一
女籠　一
風呂敷包　一
鏡臺　一
鏡　一

七ッ目

櫛　一
すじ立　一
七ッ梯子　一
提燈籠　一
手洗鉢　一
のみだい　一
たこ足　一
箸　一
さかづき　一
銚子　一
目鏡　一
位牌　一
ふくさ　一
卷狀　一

硯箱　一
千枚紙　一
文箱　一
蒲團　一
枕　一
紙書　一
駒下駄　一
女籠　一
飛石　一

八ッ目（道行）

かさ　一
杖　一
火繩　一
二ッ折鏡　一
小石　一

女持たばこ入　一
岩だい　一
遠見行列　一

九ッ目（山科閑居）

雪玉　一
棒　一
手洗鉢　一
ひしやく　一
枕　一
湯呑　一
湯呑臺　一
宣德火鉢　一
火箸　一
座蒲團　二
のりもの　一

槍

槍かけ　一
三寶（こわれ仕掛）　一
虛無僧笠　一
尺八　一
圖面　一
駒下駄　一
引揚より燒香場　澤山
槍　一
師直首風呂敷包　一
經机　一
首臺　一
香包　一
縞の財布　一

堀川

かんてき　一
丸盆　一
茶椀　一
團扇　一
三味線　二
膳　一
箸　一

飯びつ　一
飯　一
飯行李　一
梅ぼし　一
てしまござ　一
米錢　一式
煙草盆　一
火打箱　一
付け木　一
行燈　一
封じ狀　一
硯　一
手鏡　一
棕櫚箒木　一
土びん　二
猿　二
荷物包　一
編笠　二
猿遣棒　一
盃　一
かみそり　一
枕　二

蒲團　三
桶　一
米袋　一
財布　一

三人片輪

三寶　二
鍵　三
寶物袋　一
寶車　一
竹杖　一
つんぼ板札　一
いざり下駄　一
大盃　一
大ひやく　一
大甕　一

蛇の目傘　一
柳の枝　一

花競

皷　一
ふくろ　一
かい　一
かさ　一
杖　一

義太夫獨習（つゞき）

杉山田庭

前篇にてお約束した竹本此太夫の故示といふものは左の通りです。

語出（かたりだし）　聽者の耳を澄ます樣とて枕の間を小音に語り出す風もあれども、あなあち好むべきにも非ず、啻々譯の聞こゆる樣しとやかに語るが宜し、併かし場合に依り文句により語り樣の心得あるべし。

時代物（じだいもの）　地合も詞も位をつけて緩るやかに語るがよろしされど餘り延び過ぎたるは聞にくし、怠屈せぬ樣心をつけ程よく語るべし。

世語（よど）　常に物云ふ心持にて詞遣ひさらさらと、ねばらぬ樣に云ふがよろし、地合の工合も同じ心得なるべし。

物語（ものがたり）　概ね入込みたる事情を噺するものなれば、むちやつかず、きつぱりと譯の最も良く判る樣に行儀に語るべし。

修羅事（しゆらごと）　急いでは得て絶句するものなり、只口早に語る許りと心得て能く〳〵氣を沈め、おとしつけてやるがよろし。

位有人（くらいあるひと）　地合詞とも上品に武骨ならぬ樣安らかに語るべし、同じ雲上の人にても鎌足の大臣安部の行主杯官位の高下に依り夫々の心得あるべし。

大將（たいしやう）　こせつかず大樣に岐然息正しく語るべし、之れも亦其大將に因りて豪勇、智略、官位の趣心得あるべし。

うれひ　地合も詞も文句の意味を詳らかに辨まへて、憂も、つらさも自身の事と思ひとり語る我さへ自然と涕のこぼるゝ程に身を入れて語るべし、取り別け詞に愁がきかねばならず、泣落し杯も聲を轉ばすばかりにて眞實ならねば如何に場當りがしても、聽者に感動を與ふる事能はず、能く〳〵工夫あるべし。

手負（ておい）　音聲亂れ、調子揃はず、引息甲斐なくつく息ばかりの樣に語るが大體なれども、其れも餘りハア〳〵と騷がしく歌舞伎めきては下作にて聞きにくし。

ちやり　時の流行とて珍らしき事を入れて人の氣を取り笑はすもよけれど、餘り重ね重ねなるは惡ろし飽けば珍味も味無しとかや、只詞遣ひ拍子能く輕う語るが第一と心得べし。

酒醉（さけよひ）　あたまがちにしり口のもつれる樣にと、卷舌にて云ふがよけれど、之れも餘りしつこくて文句の譯が聞こへぬ樣では惡ろし、只聲づかひの大小上下に心をつけて足元のよろめく樣に語るべし。

阿房（あほう）　何となく取り締らず調子高にて素直なるがよし、飄輕過れば決句あどなうは聞えぬものなり。

どもり　云出しが出兼ね、云ひ始めると口早に云ふものなり、但しぜぜりと紛れ易きものなれば其分ちよく心得べし。

爺媼（ぢいばあ）　がんぜうなるも、かよわきもすべて老人のおもむきことばづかひに心をつくべし、されば、とて無性に齒拔の眞似をするは惡ろし、亦老人の氣性及び年齢にも心掛くべし。

女房（にようぼう）　年齢により夫々の別ちあれど女の情を能く心得へ武家はきつぱりとし、町家もいやみなきやう只やさかたに語るべし

遊女（いゆぢよ）　凡て勤めの者は地の女と違ひチト賤しきもよけれど聞苦しきは惡ろし、只洗ひ鯛とも云ふべく、何處やらあかのぬけたる樣すつぱり語るがよし、猶ほ太夫藝妓等の分ち能く工夫あるべし

娘（むすめ）　貴賤上下の品は異れど何れしほらしく、おぼこなるをよしと心掛くべし。

子供（こども）　あいらしく、かんごへにて素直に語るべし、されど餘り小兒の聲音を出すは初心らしくて聞苦し。

敵役（かたきやく）　聲高でいばりちらす許りでは却つて押しきかぬものなり、詞遣ひ何か何處やらに底意地惡く聞こゆる樣に語るべし。

詰合（つめあひ）　男女の詰合は自然と聲の甲乙ありて判りやすけれど男同士のせりふは能く心得ねば何ちらが言ふやら判り難きものなりされば切り替つたる聲を使ふも面白からず、故に只聲の使ひ方を工夫して、人には一癖とやら人々の風を拵らへて語る樣工夫あるべきなり。

掛合（かけあひ）　地合詞ともに受取渡合の透かぬ樣かぶせかけて語るがよろし、併かしものによりて樣々なれば夫々程よく心掛くべし。

艶事（つやごと）　美しき花に水そゝぎたる樣隨分奇麗に語り言葉もおもはゆげに云ふべきなり、蓋し高貴の前にて言ひ兼ぬる樣思はるゝも下品に語らぬ以上は少しも聞苦しからず。

道行（みちゆき）　之れは一際花やか

に百花爛熳たる樣に語るべし、してわきの心得は次の景事にさしてかはる事なし。

景事（けいごと）　隨分うんしやうなるがよし、節の籠りたる者なれば音の甲乙、產字の運びに心を附けねば連れて語る時杯してわきの聲入交りて文句の綾判り難きものたり、又わきはしての聲にさわらぬ樣に助くるが詮なれば、しての言ひ出すより一宇づゝあとからつけ、節尻の引ぱりも良き程に殘りて合の透かざる樣に心得て語るべし。

以下「詞より地にかゝる四地の事」其他「古人の敎、去嫌七箇條」などあれど、本稿は之にて打切り後日再び題目を更めて見參せん。（了）

▽**京濱素義美名登會**　十月一日より三日間横濱長友倶樂部に於て東都五十義會試演會として開催。會費八圓位。申込所横濱市中區永樂町一丁目、田中源次（呑笑）方。電話長者四六一〇番。

▽**京濱素義聯盟會**　十月九日より三日間大井見番演藝場にて開催。會費拾圓。申込所品川區大井水神町二〇三六番地國友紀之助（東光）方。締切九月廿日。

白茅亭雜記

富取芳河士

馬樂の芝居噺

八月末日（日は失念）寄席中繼で、馬樂の「滿月若松城」を聞えて、前に見てゐた馬樂が彷彿とした。

六月末そろ〳〵暑くなりかけた頃、日本橋倶樂部で、今昔芝居噺を復活した馬樂から招待券が送られた。

馬樂は名人圓朝作の人情話「双蝶々雪廼子別」と、戰國武士の香り床しき恩愛話「滿月若松城」とを高座の背景から本人の早替り鮮やかに、いとも古風に聽かせたのである。外に落語家連中の新作神樂「道行旅路花婿」、岡本文彌の吉井勇作岡本文彌節附「馬樂の歌」、花園壽美、同歌子舞踊の「川柳三代委」（阪井久良伎作）があつて、馬樂ファンは初夏の半日を樂しく遊んで夕刻散會した。

復活した馬樂の芝居噺は古い人にも新らしい若い人にも面白く聽かれると思ふ。落語には春夏秋冬の別はない早替りなども、此の芝居噺には四季の區別が必要と思ふ。演題に依て夏らしく或は冬らしく面白く聽かれるのではなからうか。今回の雪廼子別れと言へ、若松城と言へ、夏に適してゐて頗る感服した。

蒲生君平忌

川柳久良伎社發企で、年々七月二日根津の臨江寺で蒲生君平忌が營まれる。

川柳と云ふと、川柳の墮落した狂句と混同して、徒らに人の惡口を云ふ物と早合點する世間の淺薄さは云ふ迄もなく、西洋體制に盲從して共同和樂の日本神隨の道の現れの川柳であるのが、未だ川柳人にも理解されてゐない。吾蒲生君平先生は日本精神の一權化で、純忠を皇室に捧げんと努力せられた。そして一面川柳をも咏まれた。昭和二年先生の墓參の一人も無いのに憤慨して、川柳は作句よりも實踐から出發すべし、といふのが阪井久良伎翁の主旨である。

酒顚童子

越後の國上山國上寺は今年は幾年振りの開帳であつた。

此の寺のほとりには良寛の五合庵がある。竹の子の話や、盜人にはひられた話など此五合庵に殘つてゐる。

此の寺は酒顚童子の傳說で有名になつてゐる。寶物酒顚童子の繪卷物を開帳には展觀に供してゐる。

酒顚童子は私の町から半里と離れぬ砂子塚に生れ、生れ乍らに頭髮は紅く、人間の血が好きで、手に負ひぬ處から兩親は國上寺に稚子として預けたが、寺でも持てあまして勘當をしたので、山に寢起きをして賊を働き遂には鬼となつたといふのである。

最近島東吉氏から、酒顚童子は當時浦鹽から新潟へ渡つた露西亞人に出來た子か或は合の子で、血を飲んだといふのは葡萄酒であつたのであらう、といふ學說があるといふ事を聞いて、成程一理あると思つた。酒顚童子の生れたといふ砂子塚村の屋敷跡は、幾度家を建てゝも燒けてしまふといふので、今も杉林になつて殘つてゐる。

會報 消息

日光湯元より

德永靜翠

冠省　今以て炎暑酷しく候折柄、益々御清祥の段奉大賀候

この處、毎年極暑の候には、奥日光湯元溫泉へ參り居り候が、本年も社員全部を引連れ、更に同好の士と同伴にて湯元南間ホテルに五六日間滯在仕り候御承知の通り、この湯元は行程は多少不便に候へ共、その代り、國立公園の中心地とて、途中、原始林、白樺林あり、龍頭の瀧、湯瀧等四十八瀧あり、戰場ヶ原の如き高山植物のお花畑あり湖水あり、五千尺の高地に有之候湯元は、日中猶七十五度を超えず、朝夕は涼しさを通り越して薄寒さを覺え、浴衣の上に丹前を著る有樣にて、而かも南間ホテルの特別室よりは、眼下に湯の湖を視て、全く塵外の仙境地に有之候

滯在中、別紙の通り一夕公演會を開催致し候處、大入滿員にて、頗る好評を博し申候に就き、鳥渡御報告申上候

（八月十一日）

新口村（彌生、和孝）志渡寺（子太郎、和孝）赤坂並木（其甫、和孝）堀川（靜翠、和孝）安達（彌國太夫、和孝）

以上八月九日午後六時より日光湯元溫泉於南間ホテル演藝場。

德島縣人在京素義會 鄕土訪問記

宮內ほくろ

南の國、阿波は暑いところです。殊に名物阿波の夕風と云ふのは肌身に應へるその蒸暑さ、何んとも云ひ樣のない重苦しさを覺えるのですが、我々は鄕里故に、それをしも承知の上、土用も半の八月上旬態々寢つかれもせぬ夜汽車で遙々七百キロも遠い四國まで出懸けました。撫養（ムヤ）町は德島市から四里程はなれた古い漁師町であり、鳴門若布と鳴門鯛、それに大凧で知られた土地です。

若布は海苔と共に海草の王者で戰時食糧として臺所を賑はしてゐますが、この鳴門鯛はその色、味共に先づ天下一品でせふ。

東京で食べることに平常不自由を忍んで來た我々はこの食覺にも引き寄せられて阿波行となつたことでした。

此の撫養町には文樂座を除いては全國で恐らく只一つと云つてもよい常設の人形座があるのです。今春五月九段軍人會館へ迎へて演出して貰つたのがこの一座でした。文樂とは又違つた趣のある所謂鄕土藝術として面白い存在なのです。

三日から五日迄の三日間を別紙のやうに演りましたが、午前十時頃には既に客席が滿員になる程の盛況でして出演者一同も大そう喜んで呉れました。數里の道を遠しとせず二度分の辨當持參で聽きに來られるお客樣のあることも**亦他の土地**には見られないことでせふ。

舞臺から下りて來た熱い身體を拭ひもあへず冷たい西瓜や眞瓜に舌鼓を打つのも眞夏の樂屋のたのしみとして、誠に忘れ難いものでした。我々は三日目を打上げてからその夕頃一隻の漁船を屋入れ、鳴門の渦を見物し、その夜は鳴門を眼下に眺められる山の上の料亭に一泊しました。月こそないが星の明るい夜、對岸淡路の方にまたゝく灯の數々、松の梢をわたつて吹き上げて來る涼風にビールの滿を引いたのは勿論です。

尙本會に就ては在德島の花澤千代登師一門からは多大の後援を得て、錦上花を添へたことは又この上ない難有いことゝ存じて居ります。（ほくろ記）

於德島縣撫養町淸光座、八月三日初日、正午開演。

日吉（千代子）先代（千代菊、千代登）佐太村（ほくろ、團市）太十（松濤、紋敎）沼津（秀嶺、市左衞門）寺子屋（歸世花、團市）陣屋（錦、團市）志渡寺（いろは、團市）大切、忠七（掛合、市左衞門）—二日目—玉三（千代賀、千代登）合邦（秀嶺、市左衞門）赤垣（歸世花、團市）松王邸（松濤、紋敎）安達（ほくろ、團市）彌作（いろは、團市）新口（錦、團市）大切太十（掛合、紋敎）—三日目—酒屋（千代賀、千代登）辨慶（松濤、紋敎）鮨屋（歸世花、團市）寺小屋（ほくろ、團市）合邦（錦、團市）逆櫓（いろは、團市）

北海道より

豐澤廣助

七月廿三日北海道へ行きまして、左記番組の通り淨瑠璃會を開催致しました。なほ八月五日には札幌放送局より例の三味線「節と手順」の放送を致しましたが、同九日同所にて、京都平安會で一等に入賞せられし和田靜波氏の祝賀會を催ほし、貴地良造氏も來道されました。歸阪後八月十六日より重太夫、廣助、住太夫、寛治郎外人形入りにて九洲へ巡業に參ります。大阪文樂座は九月五日初日で本格興行であります。

於札幌博品館、七月廿八、九、卅日毎夕五時より開演。札幌素義聯合會主催、札幌各師匠後援、大阪文樂座大幹部竹本重太夫、豐澤廣助師歡迎義太夫大會。

（初日）柳（いづみ、德次郎）八陣（佐光、松登司）辨慶（五六七、若登女）沓掛（浪花、德次郎）日吉（昇榮、廣助）寺子屋（曙光、廣助）陣屋（金樂、團之助）壺坂（廣助、廣一郎）十種香（重太夫、廣助—二日目—合邦（いづみ、德次郎）新口（梅蝶、團之助）壺坂（八綱、松登司）赤垣（二葉、廣助）鰻谷（越登、團之

助)八陣(一六、廣助)忠六(三笠、廣助)陣屋(廣助、廣一郎)先代(重太夫、廣助)—三日目—阿漕(いづみ、德次郎)太十(い京、竹茂)又助(井筒、德次郎)朝顏(二鶴)揚屋(富美本)日吉(喜正)四谷(奇石)以上(廣助)　野崎(廣助、廣一郎)堀川(重太夫、廣助・ツレ廣一郎)

於小樽第四公區事務所、八月一、二、三日毎日午後四時開演。小樽松葉會主催、市內名師匠後援。同歡迎義太夫大會。

(初日)　忠六(若春改メ廣陵)柳(都)壺坂(靜波)寺子屋(時和)御殿(政蝶)野崎(松玉)陣屋(柳司改メ廣喜)紙治(千三)—二日目—日吉(二聲)鮨屋(時和)御殿(重壽)紙治(團菊)太十(團重)十種香(光玉)合邦(政年改メ廣遊)鳴戸(靜波)—三日目—鈴ヶ森(松玉)安達(廣喜)又助(千三)本下(二聲)壺坂(壽)沼津(廣陵)太十(都)壺坂(重壽)以上絃廣助)ツレ(廣一郎)—酒屋(廣助、廣一郎)宿屋(重太夫、廣助)合邦(廣助、廣一郎)辨慶(重太夫、廣助)帶屋(廣助、廣一郎)日吉(重太夫、廣助)

▽淨曲協會の改組　大日本淨曲協會は今回改組を斷行、柳原伯を會長とし齋藤金太郎(山生)氏が理事長に就任。

▽墨聲會有志　向島墨聲會の島うつぞ、山田義昇、乾桔梗、豊竹益太夫氏等は(龜造、仙十郎)新潟縣へ夏季遠征を企て、八月十六、十七兩日新發田榮座にて開演せし處非常な滿員にて、先方より日延を懇請されて遂に日定を變更して十八日も開演、聽客は定刻前より押しかけ忽ち文字通りの滿員となり一行意氣暢々として十九日は休んで新潟に遊び、新潟の淨曲界で知らるゝ伊野宮京香氏の應援で同氏宅にて一夕の會を催ほし、廿日は水原に至り水原館にて開演大好評を博したが、十月中旬頃再び新發田、新津、新潟、三條と巡遊する事になつてゐる。なほ地方の聽衆も若い人が多くなつた事が何よりの收穫であつたといふ事である。

▽梅鉢會有志　梅鉢會の黑川叶氏は彌聲、蝶花、喜樂、扇華氏等と八月廿一日長野太子會館で義太夫會を開催、同地ひさご會主催の事とて滿員の盛況を極めた。なほ大阪文樂座竹本源太夫氏も善光寺參詣を機に初日に特別出演をした。(初日)蝶八(彌聲)忠六(喜樂)八百屋(扇華)安達(蝶花)赤垣(叶)宿屋(源太夫、仙三郎)—二日目—十種香(扇華)柳(蝶花)紙治(彌聲)本下(喜樂)布四(叶)絃(勝助、扇之助)

▽九重會・八千代會　東京九重會と大阪八ヶ代會の今秋合併大會は東京に決定し、これに京都、九州、中國より參加出演者あり全國大會として十月廿六、廿七日の兩日並木倶樂部に於て開催、今回は出演者多數の爲め或は廿八日を加へて三日間となるらしい。

▽關口一樂氏　關口一樂同以與子、池田一糸同あづまの四氏は八月廿二日長野太子會館にて、廿三日は澁公會堂にて義太夫會を催ほし、澁では田島集藥氏も參加出演。(絃は小和光、美之助)

▽綾秀會　九月五日交正倶樂部にて開催。十種香(翠瓢)野崎(蟻昇)日吉(龍司)柳(壽光)長局(壽瓢)絃(綾秀、才廣)

▽女義若女會　雷門東橋亭にて第五十一回を開催。(九月一日)宿屋(津賀重)玉三(素八、播磨一)鳴戸(文昇、猿昇)合邦(小津賀、紋敎)太十(素次、素八)

▽津彌太夫獨演會　九月六日より三日間東橋亭にて竹本津彌太夫獨演會を開催。

秋の會

(九月五日迄通信ありしもの)

豊竹益太夫引退　九月廿九日　(並木倶樂部)

翼　會　九月廿六日(同)
女天會　十月三日(同)
德島縣人會　同四日(同)
梅鉢會　同廿五日(同)

太棹社彙報

本欄は大會又は新生の會を報導致します。開催前月に詳報したものは開催後の記事を略します。特種の催ほしの外前書きを略します。番組御送附なきもの、或は通信なきものは記載洩れとなります。御諒承を乞ふ。掲載順不同。

(太棹社)

綾之助會秋季大會

過般二代目綾之助を襲名し、從來の佳照會も綾之助會と改稱した竹本綾之助主催の同會は九月八日より三日間毎日午後四時より、日本橋倶樂部に於て例に依り桐竹門造指導の乙女文樂人形入りにて華々しく開演した。

(初日)　裏門(勘平、佳世子。お輕、駒榮。伴內、佳仙。絃、駒照)吃又(猿春、三生)酒屋(綾千代、猿玉)先代(住若、清一)壺坂(染登、猿幸。ツレ、津賀昇)廿四孝(綾之助、清一。ツレ、清二、清三、琴、佳世子)

(二日目)　橋辨慶(牛若、佳世子。辨慶、佳仙。ツレ、綾宏、駒榮。絃、清二、清三。ツレ、駒照、金衛)五斗(團蝶、猿幸)合邦(彌周、三生)朝顏(素昇猿玉)玉三(重之助、勝八)野崎(綾之助清一、ツレ、清二、清三)

(三日目)　組打(綾作、金衛)陣屋前(佳仙、清二)同奥(小和光、清三)引窓(昇登、綱助)戀十(越駒、津賀昇)吉田屋(小津賀、紋敎)安達(綾之助、清一)

東都五十義會 秋季大會

帝都唯一の審査會東都五十義會の第卅七回は、十月二十日より三間日日本橋倶樂部に於て開催。今回より從來の審査員安藤光樂、吉田三芳、長谷川文久、高瀨操の四氏に、大阪より竹本住太夫、野澤吉彌、豊澤團友の三氏を招聘し新らたに審査員として加る事になつた。

なほ出演申込みは大分多數に昇りさうなので、定員に達しないうち早く申込む事は、そこに落着きが出來て餘裕のある稽古にも精進され、又會の事務整備上にも、進行を與へることゝならう。

鸚鵡會秋季大會

今春の大會後京都へ遠征し頗る好評を博し、益々會の基礎をかためた鸚鵡會は來る九月廿二日午後四時半より日本橋倶樂部に於て秋季大會を開演。番組左の通り。

寺子屋(昇登、綱助)鳴戸(大阪春華、清芳)下總屋(染登、猿幸)岸姫(土佐廣綱助)酒屋(大阪小仙)大切忠七(由良之助、染登。力彌、猿幸。重太郎、綱助。喜多八、清芳。彌五郎、猿幸。おかる春華。伴内、小仙。九太夫、土佐廣。平右衛門、昇登)絃前(土佐廣)奥(清芳)

第五回 義太夫靜淨會

義太夫靜淨會は第五回秋季大會を九月十二、十三の兩日雷門並木倶樂部にて左記番組に依り開催。

(初日)日吉翠瓢、綾秀)儀作(喜香猿喜知)本下(靜語)合邦(美翠、巴住)長局(龍司、綾秀)屋陣(力)合邦(喜城、猿喜知)先代(治光、綾秀)佐太村(梅月廣三)野崎(生昇、都太夫)太十(紀鳳、綾秀)安達(淺路、綾之助)又助(未成)辨慶(濱松、和聲、三吉)寺子屋(喜玉、鶴玉)酒屋(靜岡、壽松、綱助)鰻谷(痴樂、猿喜知)陣屋(竹史、猿之助)山姥(桔梗、綱助)—二日目—辨慶(彌樂、綾秀)酒屋(好玉、鶴玉)野崎(里光)伊賀五(靜史、猿平)山名屋(綾登、綾秀)辨慶(勝駒、越駒)屋陣(喜城、猿喜知)十種香(蟻若、清司)安達(伊東、たから、龍太郎)柳(蝶花、勝助)沼津(司光綾秀)松王邸(濱松、和聲、三吉)先代(壽瓢、綾秀)忠四(喜香、猿喜知)先代(清水、湊、巴住)玉三(靜岡、正勇)太十(壽昇、松榮)儀作(清水、聲保、綱助)堀川(靜翠、和孝)

義太夫古曲發表會

春秋二回古曲を發表し好評滿員を呈してゐる義太夫古曲發表會は十月二日午後五時半より並木倶樂部に於て開催今回の珍らしい語り物は敵討優曇華龜山夢の驛路で、大切赤坂並木は例に依り結城孫三郎の操人形入にて、太夫三味線は翼扇會其他に特別出演をしてすつかり手に入つてゐるものである。

日吉(駒登太夫、松市郎)美濃屋(朝見太夫、和孝)逆櫓(卯太夫、美之助)河庄(巴太夫、扇之助)夢の驛路(初花、朝見太夫、源次郎、卯太夫。ッレ、駒登太夫、正夫夫。絃、芳太郎。ッレ、松市郎、絃内、美之助、扇之助、猿喜知、和孝)赤坂並木(彌次郎兵衛、駒登太夫。喜多八、巴太夫。和尚、朝見太夫。親父、卯太夫。絃、(猿喜知。ッレ絃内)

吉田三芳氏令弟

吉田谷次郎氏追善會

八戸市に開業してゐた三芳氏の令弟吉田谷次郎氏は、三芳食堂經營の三芳氏の手不足を助けて同氏の片腕となつて殆ど東京に働き、劇場に於ける食堂などで暫々その精勤振りを見かけたものであるが、六年前病を得て遂に逝去されたのである。三芳氏の悲嘆は筆紙につくせぬものがあつたが、時局に鑑み追善會を差し控えてゐた氏は哀悼の念禁じ得ず、八月十八日、八戸市湊座にて、十九、廿日は故人の郷里盛岡市にて新岩手日報社、東都五十義會を始め、盛岡、青森、山形、秋田、八戸の各素義連の後援と並びに應援出演の外東京よりは細川清、高瀨操、佐藤呂聲の三氏が出演し、盛大なる追善會を催ほして故人の冥福を祈つた。三日間の番組左の通り。

湊座(十八日)初手向、岸姫(三芳、猿三郎)添手向、長唄新浦島(吉田三代子)辨慶(山形、勝玉、猿三郎)百度平(八戸、一兆、播榮)伊賀五(青森、文久、榮三)又助(山形、勝輔、猿三郎)挨拶—鮨屋(清、道之助)堀川(三芳、猿三郎)酒屋(操、道之助)大切阿古屋(重忠、清。岩永、三芳。榛澤、文久。阿古屋、操。絃、道之助、三曲、猿三郎)

盛岡劇場(十九、廿日)初日—初手向岸姫(三芳、猿三郎)添手向、新浦島

（三代子）寺子屋（勝輔、猿三郎）鳴戸（盛岡、花扇、錦司）太十（勝玉、猿三郎）沼津（一兆、播榮）合邦（盛岡、稲尾仙勝）伊賀五（文久、榮三）佐太村（清、道之助）鰻谷（三芳、猿三郎）壺坂（操、道之助）阿古屋（重忠、清。岩永、三芳。榛澤、文久。阿古屋、操。絃、道之助三曲、猿三郎）—（二日目）—阿漕（呂聲仙勝）太十（勝玉、猿三郎）先代（盛岡、紫交、仙勝）吃又（文久、榮三）又助（勝輔、猿三郎）百度平（一兆、播榮）安達（秋田、旭、猿三郎）新口（稲尾、仙勝）挨拶—長唄、都鳥（三代子）紙治（操、道之助）鮨屋（三芳、猿三郎）帶屋（清、道之助）野崎（久作、清。お染、操。お光、三芳。久松、文久。母、紫交。絃道之助、ツレ、猿三郎、播榮）

御禮

東京第一陸軍病院
太棹第百三十八號
五十冊

東京第三陸軍病院
同　三十冊

寄贈者　田中絹子殿

右弊社の趣旨に贊同せられ傷痍將士慰安として御寄贈被下候段奉謝候

第一陸軍病院には五十名、第三陸軍病院には三十名の淨曲愛好家有之、毎月の「太棹」を樂しみに待ち居られ候、何卒皆樣より御寄贈御申込み賜り候はゞ幸甚の至りに存候

太棹社

社告

毎度皆樣の御援助御愛讀に依りまして、弊誌太棹も近年の發展は目覺しいものがあります。御禮申上げます。

就ましては誌代は凡て前金にお願ひ致し、前金切の際は市内の皆樣には集金に伺つてをりますが、地方の皆樣には郵便規則變更の爲め集金郵便が中止となりまして以來、前金切の際には案内狀に振替用紙を添付して御拂込みをお願ひ申上げて居りますが、まだ御拂込に接しない方々があります。御承知の通り從來と異り雜誌も中々やりにくゝなつて來ましたので、御手數誠に恐入りますが、此際何卒御拂込みを願ひ上げます。御拂込のない方には不本意乍ら本月號限り發送を停止致さねばならなくなりました。

なほ寄贈申上げてゐました方面の方々にも紙の都合で次號から出來なくなりますが何卒不惡御願ひ申上げます。

太棹社

本誌後援名譽會員

（イロハ順）

（東京之部）

廣瀨いろは氏　水戸部いづみ氏　木村司氏　鈴木信氏　高瀨昇氏　木一泉氏　荒關樂氏　關口以與子氏　吉川浪補氏　櫻井呂光氏　森內六花氏　阿部一月氏　橋本笑氏　菅田梅猿氏　中村白和氏　田春氏　和田巴洲氏　西野巴氏　佐藤北偶氏　北島斗氏　宮內ほくろ氏　佐藤平助氏　中澤之巴氏　安藤どくろ氏　吉田盛氏　小川登山氏

岡崎藤都氏　山田都十氏　安藤都洲氏　安藤都竹氏　平野都昇氏　大熊都平氏　國友都仙氏　高東都光氏　外山富好氏　堀橋彌氏　緒方わ氏　保々長平氏　久米千晴氏　栗原千鶴氏　岸竹中次氏　松史氏　河鳥氏　神樂氏　林芳氏　馬昇氏　守里氏　本痴氏　千竹氏　里史氏　林樂氏　龍鳥氏　大熊氏　和昇氏　和松氏　樂氏　勢氏　和曉氏　木氏　山かなめ氏　本木田子氏　吉金氏　鈴林氏　青石氏　飛

高橋可氏　西田可氏　黑川雅氏　米澤樂叶氏　岩崎かん昇氏　八木勝駒氏　須賀佳津子氏　大用嘉津氏　小森昇氏　田口壽氏　井上巽氏　小林太二八氏　根本團壽氏　野田高尾氏　杉山橘氏　坂倉素遊氏　井上素鳳氏　川口子太郎氏　萩田無涯氏　太原うつぼ氏　島うつぼ氏　小鹽氏　乃村乃氏　水野昇氏　中野羽氏　石川笑氏　本華之氏　山下彌生氏

加藤兒氏　遊氏　松氏　叶氏　樂氏　昇氏　駒氏　子氏　津氏　昇氏　壽氏　寿氏　尾氏　田氏　團氏　八氏　二氏　太氏　林氏　本氏　田氏　口氏　森氏　辰氏　叶氏　嘉氏　津氏　佳氏　賀氏　用氏　大氏　小氏　田氏　井氏　上氏　坂氏　倉氏　素氏　遊氏　橘氏　山氏　杉氏　根氏　野氏　小氏　井氏　田氏　口氏　森氏　叶氏　樂氏　昇氏　巽氏　壽氏　昇氏　團氏　壽氏　尾氏　田氏　本氏　林氏　太氏　二氏　八氏　巽氏　壽氏　昇氏　津氏　子氏　駒氏　昇氏　樂氏　叶氏　松氏　遊氏

福篠岡氏　中倉田氏　又山彌氏　糸門聲氏　久氏　樂氏　文氏　三氏　二氏　文氏　川氏　谷氏　田氏　長氏　川氏　上氏　杉氏　文氏　盛氏　樂氏　久氏　文氏　川氏　谷氏　田氏　長氏　安氏　部氏　富氏　士氏　鈴氏　木氏　藤氏　安氏　光氏　兒氏　雀氏　登氏　樂氏　巴氏　越氏　國氏　聲氏　語氏　野氏　田氏　原氏　河氏　松氏　岡氏　中氏　淺氏　田氏　湯氏　田氏　保氏　中氏　山氏　島氏　崎氏　田氏　中氏　岡氏　桑氏　寶氏　藏氏　寺氏　天氏　永氏　樂氏　昇氏　幹氏　鐵氏　前氏　野氏　堂氏　淺氏　大氏　及氏　柳氏　中氏　藤氏　影氏　山氏　牧氏　川氏　有氏　愛氏　淡氏　淺氏　路氏　路氏　永氏　明氏　旭氏　葵氏　花氏　蝶氏　井氏　築氏　川氏

坂本あるを氏　奥寺玉三郎氏　齋木幸三郎氏　平岡榮生氏　藤村さかえ氏　井山三郎氏　橋本壽三郎氏　藤田清鳳氏　細川松氏　金田錦氏　錦奇聲氏　淺田梗氏　星野貴氏　野島昇氏　岡本岡氏　歸山歸世氏　平井花氏　橘外氏　乾本月氏　增桔梗氏　增田喜城氏　三浦香氏　和田鳳氏　澤部扇氏　荒木金角氏　麻田鏡氏　佐久間喜氏　田喜勇氏　吉川照氏　岩木義若氏

高瀨野神靜氏　永內昭風氏　西矢晋平氏　打口秋水氏　濱田司華氏　倉田司樂氏　田壽重氏　山房紫瓢氏　花地蝶氏　菊松月氏　三龜田藤氏　龜松花氏　伊藤鶴氏　小原松樂氏　鈴木松寶氏　田美義氏　須上美津氏　村吉田豆氏　池田三芳氏　北村三國氏　野横井葵氏　口みなと氏　吉田三由氏　高井美句氏　岩瀨地操氏　西田村成氏　保坂末史氏　吉坂游曲氏　三玉有鳳氏　山並義昌氏　田義昇氏

仁德三江時沼富的井佐近白松魚池桑福平高武
木永浦原田井岡野上藤江井岡崎田原安山品笠
翠靜扇清靜盛生關聲清清茂美美瓢平一宏
松翠華昇史鶴昇路鳳司華里福峰登茶重亮
氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏

米國　杉山陶岳氏（地方之部）
同　兼廣玉氏
同　西本廣峰氏
大阪　氏家鶴紫氏
神戸　岡田源氏
大垣　吉岡十八公氏
船橋　川奈部銀司氏
下關　保良鈴鳳氏
橫濱　和田和朝氏

同　鈴木香雀氏
同　田中呑笑氏
同　小林榮玉氏
同　田島集樂氏
平塚　國森鳴門氏
川口　傍紀鳳氏
長野　田中美穗氏
八幡　古賀大彌氏
靜岡　加藤壽松氏
同　森本魁氏
同　山渡邊梅笑氏
同　久保田聲保氏
清水　栗田錦昇氏
同　西貝湊氏
同　櫛原安樂氏
濱松　飯田自樂氏
同　宮川はじめ氏
同　佐藤和聲氏
同　片橋榮氏
東京　岩崎國彥氏
安　山門氏

名譽會員
長野　田中美穗氏